〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み（20）〉

「女性研究者支援」と「大学内にある保育の場」についての覚書

― 京都大学を訪問して ―

塩崎美穂

訪問目的

二〇〇七年十月、お茶の水女子大学幼保プロジェクトでは京都大学（以下京大）を視察訪問しました。

訪問目的の一つには、「女性研究者の包括的支援」を掲げる「京都大学モデル」がどのようなものであるのか、具体的な事業内容や、実際運営上の課題などを知りたい、ということがありました[1]。というのも、京大のそれが、お茶の水女子大学（以下お茶大）のような女子大学とは異なる「女性」研究者支援であろうことが予想されたためです。共学大学における男女共同参画的な課題を確認することで、私たち女子大学の研究者支援のもつ特殊性が浮き彫りになり、われわれの課題もまた明確になるのではないかと考えました。

もう一つの訪問目的として、京大の「学内保育所」（＝大学内の保育の場）について知っておきたい、ということがありました。「大学内にある保育の場」を実践の拠り所とする幼保プロジェクトとしては、京大における五十年近い保育園保育の歴史から多くを学びたいと思っています。

つまり、京大とお茶大には、誕生の背景が歴史的

に異なる大学内の保育の場があるわけです。保育史の流れから見れば、「ポストの数ほど保育所を」という一九六〇年代の保育所設立運動と共に一九六五年に設立されたのが京大の「朱い実保育園」であり、一九九〇年以降の少子化問題の顕在化や保育所利用の通常化の中、二〇〇二年に開設されたのがお茶大の「いずみナーサリー」ということになります[2]。

乳児保育と幼児保育

またお茶大の学内には、長い歴史をもつ附属幼稚園という保育の場もあります。幼稚園の幼児保育研究は、実践者を中心に保育者養成課程の大学教員を巻き込みながら行われてきました。そして今でも、幼児保育実践者は保育研究をする人であり続けています。ところが、学内にできた乳児保育の場では、保育実践者と大学の研究者が協同研究をしようとする際、乳児保育の成立背景にある「女性研究者支援」という要素によって、従来の保育実践者を中心とした保育研究のあり方が、充分に機能し得ない状況を抱えているように思われます。

乳児保育をするということは、幼稚園のような四時間の保育時間ではなくなることをも意味します。保護者の就労や学習時間をしっかりと保障することが、子どもの育ちを支える保育になるからです。保育時間が長くなり、保育実践者に充分な研究の時間を確保する工夫を考える必要が生じています。子どもの生活を、丸ごと支える乳児保育の実践を始めた今、お茶大の保育研究としてある幼保プロジェクトでは、保育実践者の保育研究について改めて考える時期にきているのかもしれません。

保育実践の内にある学問

保育実践者の保育研究について考えるとき、戦前からの保育園保育実践者として著名な鈴木とく先生の次のような言葉を思い出します。

一見保育は、情にみちていれば足りるようですが、その奥にかくされた学問の智がどんなにか保育をふくらますかをずっと思ってきました。／幼い人たちの何気ないしぐさを深くみてとる瞬時の感得はその奥にかくされた学問の苦労がなければ、その事を生かすことができないのではないかと思います[3]。

とく先生の協同研究者であった教育心理学者の山下俊郎先生は、「本当に子どもを愛するものは学問を愛す」と書き記した本をとく先生に渡されたそうです。

保育園なのか、幼稚園なのかということではなく、保育実践者が学問を必要とすることの意味をとらえ、保育の場が大学にあることの意義を、改めて見いだしたいところです。

視察報告を若手から

さて、今回の視察訪問には、東京学芸大学院生（当時）の湯浅さんに同行してもらいました。それは、湯浅さんが愛育養護学校に通う若手の保育実践者でもあり、私たち幼保プロジェクトの「総合的保育者」養成構想に直結する課題に、若手からの新たな視点を提起してくれるだろうと考えたからです。実際、若手保育者がどのような保育実践や保育研究に学びたいと考えているのか、今の保育実践に資っする学びとはどういうものなのか、保育者にとっておもしろい研究領域とは何なのかなど、湯浅報告から見えてくることは少なくありません。

保育研究をする院生であり、かつ若手保育者でもある人の視点から、京都の視察報告をします。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師）

註

1 詳細については、「平成一八年京都大学女性研究者支援センター報告書」およびホームページhttp://www.cwr.kyoto-u.ac.jpを参照した。

2 朱い実保育園については、朱い実保育園職員会編『朱い実の子どもたち』（ミネルヴァ書房　一九八五）を参照。

3 鈴木とく『保育は人間学よ』（小学館　二〇〇〇）二〇四・二〇五頁